

古代

第3章 古代国家の展開 3. 律令国家の転換 (1) 平安遷都

ふじわらのたねつぐ

藤原種継暗殺事件と伯耆の豪族

『日本紀略』延暦四年(七八五)九月二十三日条
中納言兼式部卿で近江按察使でもある藤原種継が賊の襲撃を受け、矢で射られた。二本の矢が体を貫き、種継は死亡した。

『日本紀略』延暦四年九月二十四日条
桓武天皇は平城京から長岡京へ到着されたが、藤原種継はすでに死亡していた。天皇は各機関へ犯人の搜索・逮捕を命じ、大伴竹良と近衛の伯耆桴麻呂、中衛の牡鹿木積麻呂が捕らえられた(中略)。伯耆桴麻呂の自白によれば、「主税頭の大伴真麻呂、大和太掾の大伴夫子、春宮少進の佐伯高成、大伴竹良らが共謀し、伯耆桴麻呂、牡鹿木積麻呂に種継を襲わせた」とのことであった。大伴継人、佐伯高成らの証言によると、すでに死亡している中納言の大伴家持とも生前に「大伴、佐伯の両氏で種継を排除する。これは皇太子(早良親王、桓武天皇の弟)の命で実行するものである」と謀ったとのことであった(中略)。首謀者である左少弁の大伴継人、佐伯高成、大伴真麻呂、大伴竹良、大伴湊麻呂、春宮主書首の多治比浜人を処刑し、種継を射殺した伯耆桴麻呂、牡鹿木積麻呂の二人を山崎の椅南河頭で処刑した(中略)。(藤原)雄依と春宮亮の紀白麻呂、大伴家持の息子である右京亮の大伴永主を隱岐に流した(後略)。

『続日本紀』延暦四年(七八五)正月辛亥条

(前略)春宮亮従五位上紀朝臣白麻呂爲兼伯耆守。(後略)

解説

■事件の概要

長岡京へ遷都後の785(延暦4)年9月23日夜、造長岡京使で、中納言と式部卿を兼任する藤原種継が造宮監督中に矢で射られ、翌日死亡した。暗殺犯として大伴竹良、大伴継人、佐伯高成ら十数名が捕縛されて斬首となり、同年8月28日に死去した大伴家持は首謀者として官籍から除名された。

その後、桓武天皇の皇太弟の早良親王も関与したとされ、太子を廃され配流の途中で憤死する。早良親王が事件にどの程度関与したかは不明であるが、大伴家持が生前春宮大夫であり、紀白麻呂が春宮亮兼伯耆守、佐伯高成が春宮少進であるなど、皇太子の家政機関である春宮坊の官人が逮捕者の中に多く含まれている。

この後、平安京へ短期間のうちに遷都することになったのは、早良親王が怨霊として恐れられるようになった事も含めて、この一連の事件が原因のひとつであったといわれている。

■暗殺実行犯・伯耆桴麻呂

実行犯の一人の伯耆桴麻呂は、その名から伯耆国の豪族と考えられ、事件以前から近衛(内裏を守護する兵)を務めていたものと推測される。785年正月、伯耆守を兼務することとなった紀白麻呂は、桴麻呂に接近して種継暗殺を命じ、一方の桴麻呂も白麻呂に協力することによって、政変後の一族の伯耆国内での勢力拡大を企図したものであろう。

なお伯耆氏は、683(天武12)年に連を賜姓された伯耆造と同じ氏と思われ、8世紀には伯耆広国が『正倉院文書』に、伯耆広君が平城京出土木簡で確認され、いずれも下級官人として活動していたことが知られる。また、11世紀には伯耆国貴が伯耆掾、伯耆国景が伯耆権介、伯耆国任が伯耆介と在庁官人に任じられており、もと国造で郡司となった伯耆の地方豪族と推測されるが、詳細は不明。

(担当：石田敏紀)

参考資料

- ・鳥取県『鳥取県史1 原始・古代』(1972年) [\(とっとりデジタルコレクション\)](#)
- ・新編倉吉市史編集委員会編『新編倉吉市史 第1巻 古代編』(1996年)